

当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」

(2016年度第3回(通算第6回)研究会)

Title: Typological Study on “Altaic-type” Languages (The 6th meeting)

日時：2017年2月11日(土)

Date/Time: 11th Feb. 2017

場所：AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

Venue: Room 306 (Multimedia Seminar Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 梅谷博之 (AA 研共同研究員, 東京大学)

「モンゴル語の連体節」

(要旨) 本発表では、モンゴル語の連体節の特徴を概観した後、今後さらなる調査が必要となる事柄や調査にあたって着目すべき点を挙げた。具体的には次の点を指摘した。

(1) モンゴル語の「外の関係」の連体節のうち「相対的補充」のものにおいては、連体節の述語である形動詞に属格接辞が付加されることが先行研究で指摘されている。しかし実際には、属格接辞が付加されない形も現れうる。(2) 先行研究の指摘によれば、連体節内の主語名詞句は属格で現れることが多い。しかしこの観察結果は、「内の関係」の連体節のデータに基づくものである可能性がある。「外の関係」の連体節内の主語名詞句の形を観察すると、「内の関係」とは対照的に主格で現れることが多い。ただし、「外の関係」の連体節内でも主語名詞句が属格で現れる場合があり、それには、主語名詞句の指示対象の種類(非生物か人間か)や、連体節の主語名詞句の連体節内での位置(連体節の述語の直前に現れるかどうか)が関係している可能性がある。(3) 連体節により修飾される名詞がxereg「事・必要」であり、かつその連体節が「外の関係」のものである場合、連体節の述語が過去・完了を表すもの(-sanによる形動詞)であっても、実際には未来に生じる事態を表すことができる。

2. 吉岡乾 (AA 研共同研究員, 国立民族学博物館)

「ブルシャスキー語の節連結」

(要旨) アルタイ型言語は、いわゆる副動詞が存在するというのが特徴の一つと考えられている。本発表では、ブルシャスキー語の、動詞から作られ節連結を主要な用法とする形式に関して、周辺の印欧語(ドマーキ語、シナー語、カティ語、ウルドゥー語)と

対照しつつまとめた。更に、それらの形式がアルタイ型を特徴付けている副動詞と同種のものとして捉えてよいか否かを検討し、ブルシャスキー語のアルタイ性の多寡を量ることを目指した。ブルシャスキー語の節連結をするための形式は、定形動詞から作られるもの、不定詞や分詞に格接尾辞などが付いたもの、「接続分詞」と呼ばれる独特な語形のものなどと多様であり、指示転換や相対時間などの条件に合わせて使い分けされている。どれを副動詞と呼べるかは結局、定義次第となりそうであるが、「接続分詞」が最も「らしい」こと、そういう意味では周辺言語も含めブルシャスキー語はややアルタイ的だと言えることが判った。

報告者の報告後、今後の日程調整および報告者の依頼をおこなった。

文責：山越康裕